

里の春、山の春

新美南吉

青空文庫

野原にはもう春がきていました。

桜がさき、小鳥はないておりました。

けれども、山にはまだ春はきていませんでした。

山のいただきには、雪も白くのことっていました。

山のおくには、おやこの鹿がすんでいました。

坊やの鹿は、生まれてまだ一年にならないので、春とはどんなものか知りませんでした。

「お父ちゃん、春ってどんなもの。」

「春には花がさくのさ。」

「お母ちゃん、花ってどんなもの。」

「花ってね、きれいなものよ。」

「ふうん。」

けれど、坊やの鹿は、花をみたこともないので、花とはどんなものだから、春とはどんなものだから、よくわかりませんでした。

ある日、坊やの鹿はひとりで山のなかを遊んで歩きまわりました。

すると、とおくのほうから、

「ぼおん。」

とやわらかな音が聞こえてきました。

「なんの音だろう。」

するとまた、

「ぼおん。」

坊^{ぼう}やの鹿^{しか}は、ぴんと耳をたててきいていました。やがて、その音にさそわれて、どんどん山をおりてゆきました。

山の下には野原がひろがっていました。野原には桜^{さくら}の花がさいていて、よいかがりがしていました。

いっぽんの桜^{さくら}の木の根^ねかたに、やさしいおじいさんがいました。

仔鹿^{こしか}をみるとおじいさんは、桜^{さくら}をひとえだ折^おつて、その小さい角^{つの}にむすびつけてやりました。

「さア、かんざしをあげたから、日のくれないうちに山へおかえり。」

仔鹿^{こしか}はよろこんで山にかえりました。

坊^{ぼう}やの鹿^{しか}からはなしをきくと、お父さん鹿^{しか}とお母さん鹿^{しか}は口をそろえて、

「ぼおんという音はお寺^{てら}のかねだよ。」

「おまえの角^{つの}についているのが花だよ。」

「その花がいつばいさいでいて、きもちのよいにのしていたところが、春だったのさ」。

とおしえてやりました。

それからしばらくすると、山のおくへも春がやってきて、いろいろな花はさきはじめました。

青空文庫情報

底本：「いんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：もりみつじゅんじ

2002年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

里の春、山の春

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>